

ピウスツキのサハリン研究とバフンケの^{されこうべ}髑髏¹

井上 絃一

本日は「ブロニスワフ・ピウスツキ」「彼のサハリン研究」「樺太南部東海岸のバフンケ會長」という三題断を申し上げる予定でしたが、彼の生涯を辿るだけで紙幅の6割も喰ってしまい、後者の2題は大幅な削減を余儀なくされました。しかし以下の記述は恐らく、簡潔ながらも彼の一生を通観する最初の評伝とされますので、御寛恕のほどを願います。

1. ブロニスワフ・ピウスツキの生涯

ブロニスワフ・ピョートル・ピウスツキは1866年10月20日(西暦11月2日)、ロシア帝国ヴィルノ県(現リトワニア)東部のズーウフ荘園(現ザラヴェス)[写真1]で呱呱の声を上げました。1866年は幕末の慶応2年に当たりますが、日本では夏目漱石が1年後、二葉亭四迷は2年前に生まれています。ピウスツキが4回目の訪日で東京に滞在する1906年前半には、漱石や二葉亭と同じ東京の空気を吸っていたわけですが、漱石と出会う機会はなかったようですが、親しく交際した二葉亭は終生の友となりました。

リトワニア

ブロニスワフは父ユゼフ・ヴィンツェンティ・ピョートル・ピウスツキと、ビレーヴィチ家出身の母マリア[写真2]の長男で、年子の弟ユゼフ・クレメンス[写真3]は、1918年にポーランド国家を再興したピウスツキ元帥です。そのほかに2人の姉、4人の弟、2人の妹がいました。ピウスツキ家もビレーヴィチ家もリトワニアの名門貴族です。しかし貴族層は完全にポーランド化されて、ポーランド語を話し、己をポーランド人と自任していました。ピウスツキ家では熱烈な愛国者の母マリアがポーランド愛国教育を子供たちに実践し、ポーランド国家の再建に挺身する人物になるよう鼓舞したと伝えられます。その際のポーランドは、旧ポーランド王国と旧リトワニア大公国を包摂するかつての「大ポーランド王国」でした。子供たちはスイス女性の家庭教師からドイツ語とフランス語を学びました。

1863年に出来た第3次三国分割下で最大かつ最後の第3次蜂起には父ユゼフもヴィルノ県の地方名士として参加し、ロシア軍によって敢えなく鎮圧されました。帝政政府はその後、「一人の皇帝、一つの信仰、一つの言語」を標榜するロシア化政策を断行しました。1877年に県都ヴィルノ(現ヴィルニユス)のヴィルノ第1ギムナジヤ(高等学校)に入学したブロニスワフ、ユゼフ兄弟を待っていたのはロシア語によるロシア化教育です。剰えカトリック信者の生徒らはロシア正教寺院で、ロシア皇帝のためにロシア語で祈ることまでも強制されたのです。教室でも街頭でもポーランド語の使用は厳禁でした。

1882年、中学5年生のピウスツキ兄弟は同世代の若者らと語らって自主教育サークル「スプイニャ」[写真4]を結成し、禁書の講読などに着手します。若者たちに非合法活動を促したのは、首都ペテルブルグで展開されていた革命(所謂ナロードニキ)運動で、「社会主義はロシア語の衣を纏って東より、ペテルブルグからヴィルノへやってきた」とも評されました。サークルのある例会では社会主義と愛国心、己のアイデンティティを問う議論が沸騰し、「我等は《リトワ

¹ 本稿は、日本東欧スラブ関係研究会が2018年2月25日に早稲田大学政経学部で開催した公開講演会「アイヌと近代日本 そして樺太」で発表した未刊行講演録です。講演会の前半では市川守弘氏が「北海道開拓150年の負の遺産：アイヌの権利を考える」と題して講演されました。

ニアのポーランド人》であり、我等の任務は、この国において我等が後見者たるべき他の《より弱い》諸民族に危害や圧迫を加えることなく、ポーランド文化を維持することにある」という決議を採択したと伝えられます。サークルを主導するピウスツキ兄弟はさらに、いまだリトワニア語で生活する県都の職人たちにポーランド語の読書きを教える危険な地下活動にも従事し、ブロニスワフはリトワニア語を熱心に学び始めました。

サンクト・ペテルブルグ

ブロニスワフは1885年、のちに転校を強いられたヴィルノ第2ギムナジヤの7年次を修了すると、退学してペテルブルグへ旅立ちました。帝都では同年8月、ペテルブルグ第5ギムナジヤ8年次への編入を果たし、翌86年6月に同校を卒業、9月にはペテルブルグ帝国大学法学部に入學します。彼は1887年5月にペテルブルグから樺太島へ追放されますから、帝都滞在は僅か1年9ヶ月で中断されました。

突然の中断はブロニスワフが1887年3月3日、ロシア皇帝アレクサンドル3世暗殺未遂事件に連座して逮捕され、懲役15年の重刑とサハリン流刑が宣告されて出来しました。同事件は、1881年のアレクサンドル2世暗殺事件(所謂「3月1日」事件)に倣って第2の「3月1日」事件と喧伝されましたが、レーニンの兄アレクサンドル・ウリヤノフらを首謀者とする「人民の意志」党「テロリスト・フラクション」が企てたとされる刑事事件です。容疑者15名が逮捕・起訴されて全員に死刑が宣告されますが、ウリヤノフを含む5名に死刑判決が下り、皇帝へ助命嘆願が奏上された10名は、刑期に差こそあれ禁錮懲役に軽減されました。ブロニスワフへ下った15年は無期懲役、懲役20年に次いで3番目に重い量刑でしたが、父親が嘆願書を提出したようです。

ブロニスワフが法廷で告発されたのは、ウリヤノフが逮捕に備えて起草した「フラクション綱領」の印刷に自宅を提供し、帝都とヴィルノのテロ組織間の共謀に手を貸したことに尽きるようです。テロ組織のリーダーの一人だったペテルブルグ帝大生ユゼフ・ウカシェヴィチは、ヴィルノ第1ギムナジヤの2年先輩でしたから帝都でも付き合いがありました。この先輩との関係で、ブロニスワフはテロ組織の行動に巻き込まれたというのが真相のようですが、テロには反対と法廷で陳述しています。とはいえロシア社会の根底的変革を唱道する同組織の思想には、彼も共鳴せざるを得なかったと思われれます。その際の葛藤は、獄中で記した父への手紙からもよく窺えます。彼は恐らく、思想的には共鳴するも、その手段と行動を是認できぬ同伴者、結果的には被害者だったと言えるでしょう。

1887年5月27日、父ユゼフが遠くから見送る中、ブロニスワフを乗せた護送列車はペテルブルグを出発、モスクワを経由して6月2日にはオデッサに到着しました。ロシア義勇艦隊社の「ニージニー・ノヴゴロド号」は同9日、525名の既決囚を積載してオデッサを出港、スエズ運河・コロンボ・シンガポール・長崎・ウラヂヴォストク(浦塩)を経て、8月3日には樺太島北西海岸のアレクサンドロフスク(無港)に入港します。1899年3月に離島するまで12年を過ごすことになるサハリン北部での流謫生活が、こうして始まりました。

サハリン (1)

国事犯徒刑囚としてのブロニスワフは1887年8月12日から足かけ10年、ティミ河上流部に設置されたリュコフスク監獄²で刑期を勤めます[写真5]。通常の懲役囚に課される強制労働のほか、監獄や管区警察署での事務や測候所での気象観測にも従事し、官吏子弟の家庭教師も務めました。ティミ河上流域一帯には土着民ギリヤーク(現ニヴフ)の集落が点在していましたから、植民地体制への服属を余儀なくされて苦悩する彼らに同情し、その苦悩を軽減することに生甲斐も見出します。こうしてニヴフ語を習得し、フォークロア・テキストの採録も手掛けるようになります。リエフ・シュテルンベルグと出会った1891年1月以降は、協力してニヴフ

² 1878年、流刑囚向けに開設された入植村リュコヴォ(大ティモヴォ)、即ちリュコフスコエ村。

語とその文化のフィールドワークに従事し、人類学の実践に踏み出しました。

流謫 9 年目の 1896 年はピウスツキにとって変化の年でした。年初にティミ河上・中流域のニヴフの間に飢餓が蔓延すると、その実態と原因を探るべく流域の 7 集落を歴訪します。行政府と掛け合って監獄余剰金から緊急対策費を捻出させ、救荒食糧の給付に漕ぎつけただけでなく、恒久的対策として馬鈴薯の栽培と鮭の塩蔵加工を導入する実践にも踏み出しました。馬鈴薯栽培は 1891 年にも試みたものの根付かず、今回は飢餓を奇貨として行政府から土地と農具と種芋の供与を取りつければ、ティモフスク・ニヴフらを説得して成功を収めました。飢餓は翌 97 年にも出来し、同事業は 98 年にも繰り返されましたから、ティミ上・中流域のニヴフの間には馬鈴薯栽培が生業として定着したものとされます。

父親のユゼフは息子の減刑と早期の社会復帰を願って、1892 年、94 年に嘆願書を奏上していましたが、1896 年の嘆願書は遂に奏功し、5 月 14 日付ニコライ 2 世戴冠特赦令による量刑の 3 分の 1 減免を成就しました。かくて 10 年に削減されたプロニスワフの刑期は 1897 年 2 月 27 日に満了、彼はティモフスク管区リュコフスコエ村流刑入植囚として登録されることとなります。

1896 年 7～8 月には監獄当局がピウスツキをサハリン南部(コルサコフスク管区)へ派遣し、コルサコフスク(大泊)とガルキノ・ヴラスコエ(落合)で測候所建設に当たらせました。このときの樺太アイヌ(現エンチュ)との初邂逅は、彼のその後の人生を決定する重大な契機となります。

11 月末にティミ流域に戻ったピウスツキは、ニヴフらによる初めての鮭の塩蔵加工に着手します。これは彼らの基本的越冬食である鮭鱒類の伝統的な乾製魚(ユーコラ)に加えて、ロシア式塩蔵加工も導入することで、越冬食料の安定化もさることながら、むしろ塩蔵魚の国庫納入という生産事業を意図するものでした。この年は始めた時期も遅くて参加者も僅かでしたから、ささやかな成果で終わりますが、翌 97 年には知事の支援も取り付け、36 名の参加者が 2 ヶ月がかりで取り組み、国へ納めた塩蔵魚からは 300 ルーブリの売却益を稼ぎ出しました。鮭の塩蔵加工も新生業としてこの地に根付いたことでしょう。

ピウスツキは 1897 年 3 月以降、強制労働からは解放されたものの、入植囚には島外への移住が許されません。そこへ 5 月 23 日、浦塩のアムール地方研究会から附設博物館の物品管理人のポストに招きたいとの朗報が届きました。同会からの陳情や父ユゼフの嘆願書などが功を奏して、11 月 28 日にはプリアムール総督が彼の浦塩への転出を許可するところまで漕ぎつめますが、その後も一進一退が続きました。

彼は 1897 年 9 月に島都アレクサンドロフスク(匝港)へ居を移して、翌 98 年 5 月まで行政府医務局主任の下で文書係を務める傍らで、論文「樺太ギリヤークの困窮と欲求」を 98 年 4 月 20 日付で擲筆しました。これは彼の人類学関係処女作です。

ピウスツキは 1899 年 2 月、浦塩における 1 年限りの在住許可証をようやく入手すると直ちに旅装を整えて、樺太島を後にしたと思われます。

ウラヂヴォストク

1899 年 3 月 9 日、彼は浦塩に到着して、ロシア帝室地理協会プリアムール支部傘下のアムール地方研究会附設博物館内に物品管理人として住み込みました。こうして 3 年 4 ヶ月の浦塩時代が始まります。その間には 1900 年のパリ万博への極東関係出品コレクションを構築し、博物館の主事や司書を務め、標本台帳を作製し、沿海州行政府統計委員会にも雇用され、その活動にも積極的にかかわりました。1901 年 5 月には、必ずしも居心地の良くなかった博物館を退職しています。また同年夏には、サハリンでの教え子のニヴフ少年を浦塩に呼び寄せて、沿海州都の実科学校に通わせました。

この少年は、ニスパインという名のシャマン(ティミ河中流域アド・ティミ出身)の息子インディンです。ピウスツキが 93/94 年の冬に初めてロシア語と算盤を手ほどきしたニヴフの若者たちで、落伍しなかったのは 10 才のインディンだけでした。少年は 96/97 年の冬場にも彼の許に通ってロシア語の読書きを身に着けたので、ピウスツキが 97 年の夏にロシア語教室を開催す

る際はインディアンを教師として雇いました。したがって、彼はこの頗る聡明な少年をニヴフの子供たちの第1号教師として養成するべく、浦塩の実科学校で学ばせたのです。インディアンは4年次課程を修了したところで肺結核を発病しますが、その後もニヴフ語テキストの翻訳ではピウスツキの有能な助手を務めつづけました。

1902年4月2日、息子の流謫の身を案じつづけた父ユゼフがペテルブルグで永眠します。享年69でした。1887年5月27日にペテルブルグのモスクワ駅頭で交わしあった眼差しだけの挨拶が、父親との今生の別れとなりました。

サハリン (2)

1902年7月11日、ピウスツキは12年を過ごした苦役の島に舞い戻ります。ペテルブルグのロシア帝室科学アカデミーからエンチウとウイлтаの民族標本蒐集を委託されて、浦塩から海路で大泊に到着したのです。今度は研究者として1905年6月まで「牢獄の島」に留まりませんが、第2のサハリン時代はこうして始まりました。

今回の樺太島における3年弱の滞在は「出張」と記録されています。初年度の1902年は科学アカデミーから1,000ルーブリ、1903～1905年は「中央・東アジア研究ロシア委員会」から1,950ルーブリという、少なからぬ調査研究費を受領していたからです。これは同委員会の調査助成第1号でした。ピウスツキのサハリン研究は、必ずしも潤沢とは言えぬまでも多額の公費で賄われたわけです。

公刊された5篇の復命報告によると、1902年はまず西海岸の真岡で調査後、初来日して函館に3週間滞在したあと大泊に戻り、東海岸へ赴いてオタサン(小田寒)で熊祭りに参加、その後はルレ(魯礼)で聴取り調査に従事し、冬場には落合と小田寒でアイヌ子弟のための識字学校を開設しました。12月半ば、東海岸のアイ・コタン(相浜)にあるバフンケ酋長(日本名木村愛吉)[写真6]のロシア式丸太小屋に寄寓して越冬、バフンケ宅は彼の「根城」となります。

1903年前半は相浜とその周辺に腰を据えてアイヌ語の学習とテキスト採録に励みました。6月24日(西暦7月7日)から9月24日までは北海道に滞在して、シェロシェフスキのアイヌ調査に参加しました[写真7]。これは彼の第2回来日です。12月2日には東海岸の内淵に寄宿制アイヌ学校を開設し、ピウスツキ自身も教鞭を執りますが、1904年1月29日(西暦2月10日)の日露開戦を受けて、予定の3月末日を待たずに閉校を余儀なくされました。

1904年6月13日～11月13日、ピウスツキは5ヶ月をかけてタライカ地方とティミ河上流域の踏査を敢行しました。日本軍上陸が危惧される島の南部から逃れる目的もあったようです。タライカ地方ではタライカ・アイヌとオロッコ(現ウイлта)を調査し、ティミ上流域では旧知のニヴフたちを訪ねました。彼は日露戦下の樺太島を旅して希有な実録を残した、数少ない目撃者の一人です。

ピウスツキは戦時下でも識字教育を断念せず、1904年12月から翌年2月には学校の代わりに、希望者を対象に訪問授業を実施しました。

1904年12月20日(西暦1905年1月1日)、ロシアの旅順要塞が陥落します。この大事件が樺太島脱出の決意を彼に固めさせたようです。1905年々初からは離島に備えて残務整理に着手します。2月半ばの2週間は泊に滞在し、収集標本の発送や保全措置、採録したテキストの翻訳、統計データの収集、標本を製作してくれたアイヌらとの決済などに奔走しました。

3月6日に「根城」の相浜を犬橈で出発したピウスツキは、東海岸を北上して、感冒が猛威を奮う敷香に至り、自らも罹患したため10日以上滞りを強いられますが、3月末には北サハリン南部のロシア人村オノールに到達しました。以降の2ヶ月半はオノール村、リュコフスコエ村、デルピンスコエ村に逗留、調査報告4篇を擱筆して知事へ提出しています。

ピウスツキは6月11日、小型舟艇「ウラヂヴォストク号」で垂港を発ち、翌12日にはアムール河口のニコライェフスク(尼港)に上陸し、7月初旬にハバロフスク着、8月初めには3年ぶりの浦塩に帰着しました。したがって、8月23日(西暦9月5日)のポーツマス講和締結の報には浦塩で接しますが、ちょうどその日に予定されていたピウスツキの連続講演会の第3回は、報

道を受けて中止となりました。

12月5日(西暦同18日)頃、ピウスツキは友人のマトヴェイエフ³、その11才の娘ゾーヤとともに浦塩を出航して、日本へ向かいました。

時間をやや戻しますが、ピウスツキが1902年8月30日に函館滞在から大泊に戻った折、リャプノフ樺太島武官知事と懇談する機会がありました。彼がアイヌ子弟の識字教育の意義を説き、識字学校の開設計画を開陳すると、知事は満腔の賛意を表して支援金150ルーブリを約する傍らで、彼にはアイヌの人口調査を委託しました。しかし、翌3年10月28日付の私信では「異族人⁴統治規程草案」の起草と「コルサコフスク管区のアイヌに関する詳細情報」の提出も懇願しています。ピウスツキはいずれも見事に完遂して、1905年6月の離島前に知事へ提出しています。

識字教育は既述のように1902/3年、1903/4年、1904/5年の冬場に毎年実施されました。初年度は落合と小田寒で開校されて、落合ではインディン、小田寒では千徳太郎治が教師を務めます。ピウスツキは、肺結核に侵されたインディンを故郷の島で養生させるべく浦塩から帯同して、落合で教壇に立たせたのです。インディンは1903年2月28日、病状の重篤化で授業を中断、大泊の病院に収容されて4月初めに亡くなります。しかし、彼の教え子のトゥイチポは1904/5年の冬場に落合で実施された訪問授業を担当しました。なお、詩人のニコライ・アムールスキーは1915年の詩作「継子の自然児」で、ブロニスワフとインディンの悲劇的關係を活写しています。

内淵生まれの千徳太郎治は1875年、3才のときに北海道へ移住し、対雁学校で日本語の読書きを身に着けます。1895年に帰島、1902年にピウスツキと出会ってロシア語の特訓を受けた結果、1903年の北海道調査にはアイヌ語・日本語・ロシア語の通訳として参加し、1903/4年の寄宿制アイヌ学校ではピウスツキの助手、1904/5年も訪問教師を務めました。

3ヶ月に及んだ北海道アイヌ調査は、ロシア地理協会が日露開戦の前年にシェロシェフスキのために実施したものです。ピウスツキ自身は僅かしか書き残していませんが、シェロシェフスキの旅行記「毛深い人たちの間で」(1926)から概要は窺えます。シェロシェフスキ、ピウスツキ、千徳の一行は函館から白老・平取と行脚を続けたものの、険悪化した日露関係を慮った在京ロシア大使館の命令で中止を余儀なくされました。因みに、ピウスツキはこのとき平取で平村ペンリウク、札幌ではジョン・バチェラーと会っています。

第2のサハリン時代では、ピウスツキが相浜のバフンケ酋長の姪チュフサンマ[写真8]と結婚し、2児をもうけた事実を看過するわけにはいきません。彼は1902年12月半ば、相浜のバフンケ宅を「根城」に選びます。隣接するアイヌ式住居(チセ)で父親のシレクアと暮らすチュフサンマは、彼の世話を焼くばかりか、アイヌ語教師もよくこなしたらしく、恐らく1903年2～3月には相思相愛の仲になったようです。そしてピウスツキが函館から相浜に戻った直後の9月末、彼らの婚礼がアイヌの伝統に則って挙行されました。1904年2月11日には長男助造[写真9]が相浜で誕生しますが、長女キヨが生まれた1905年12月8日には、彼女の父親は日本への旅の途上だったか、すでに日本にいました。

³ ニコライ・ペトロヴィチ・マトヴェイエフ(1865~1941)。ニコライ・アムールスキー等と号する詩人でもありました。日本で生まれた最初のロシア人といわれ、ロシア革命後の1919年には日本へ亡命、神戸で没しています。

⁴ 「異族人」はロシア語 *инородцы* に対して日本のロシア史学界が与えた定訳です。北ロシアやシベリアのほか中央アジアや北コーカサスの原住民族も包摂していました。イェカテリナ女帝の命でスペランスキーが起草した「シベリア異族人統治法」(1822)で初めて導入されて、それ以降のロシア帝国で正規の行政・司法用語として定着、一つの社会身分として取り扱われました。ロシア内務省は1898年に同法の改正に着手、ハバロフスクのプリアムール総督は1900年、配下のすべての地方行政長官に自前の改訂案の提出を命じました。改訂案起草を託すべき人材の不在に困り果てたリャプノフ知事は、偶々来島したピウスツキへ課題の丸投げを余儀なくされて、「懇願」する以外になかったわけです。

ピウスツキはポーツマス条約直後の1905年9月半ば、三度目の訪樺を敢行しました。東海岸の相浜を訪ねて身重のチュフサンマと助造を引き取り、家族を連れてヴィルノへ帰郷するのが目的だったと思われませんが、親族らの峻拒に遭って断念を余儀なくされました。これがピウスツキと妻子の永久の訣別となります。この家族は日露戦争に翻弄されて、遂には離別までも強いられたわけです。

日本

ピウスツキの4度目の日本滞在は、1905年12月半ばから翌6年8月3日まで7ヶ月半に及んで、半年は東京、最後の1ヶ月は長崎で過ごしました。東京で親しく交際したのは長谷川辰之助(二葉亭四迷)[写真10]、横山源之助(天涯)、上田将、宮崎民蔵・寅蔵(稲天)兄弟、福田秀子、遠藤清子、橘糸重らで、またアイヌ研究者(坪井正五郎、鳥居龍蔵、関場不二彦、小矢部全一郎)や中国人革命家(孫文、黄興、宋教仁)らとも付合いがありました。長崎では亡命ロシア人の発行する露文紙「ヴォーリャ(自由)」の活動にも協力しています。ピウスツキは新聞等で、「露国人」革命家・人類学者・日本婦人研究家などと様々に報じられましたが、二葉亭は彼を「囊中屢ば空しと言ふ有様で、衣服などは粗末で、食物などは何をも選ばぬ、命さへ継げば、それで充分だ、ドウしてもアイヌの如き憐れむべき人種を保護しなければならぬと考へて居る。局外者から見れば、實に馬鹿げて居るやうだが、其のあどけない眞面目の態度が、吾々の同情を惹く所である」と評しています。実に正鵠を得た人物評でした。

ヨーロッパ

1906年7月30日、ピウスツキの乗船する米国の大北汽船社の「ダコタ号」は長崎を出港し、31日神戸寄港、8月1日横浜入港、そして3日には同港を出航し、太平洋上を一路シアトルへ向けて航海を続けました。

8月16日頃シアトルに上陸したピウスツキは、大陸横断鉄道で米国を東進、シカゴを經由してニューヨークに到着すると、さらに大西洋を横断して欧州に至り、ロンドン・パリを経てオーストリア統治下のポーランド「ガリツィア」に到達し、かくて念願の「祖国」⁵帰還を果たしました。これ以降パリで客死する1918年5月までの12年が、彼の人生で最後の、欧州時代です。

1906年10月21日頃古都クラクフに辿り着いたブロニスワフは、1914年の第1次世界大戦勃発(8月5日)の3ヶ月後まで8年間、ガリツィアを拠点に様々な活動を繰り広げました。まずはポーランドと日本の文化交流です。在京中のピウスツキが二葉亭と語らって立ち上げた日本・ポーランド協会の活動は、その後も両者の交信を通して継続され、文学作品の相互翻訳が試みられて、日本側で3件、ポーランド側では1件の作品が翻訳公刊されました。第2はヴィルノ時代の幼馴染との「結婚」です。1906年11月21日付の二葉亭宛書簡が「許嫁」に言及し、「たぶん結局は結婚することになるでしょう」と記しますが、後に伴侶となるマリア・ジャルノフスカ(旧姓バニェヴィチ)に関する初情報でした。当時のマリアはペテルブルグで、夫ヤン・ジャルノフスキの許に一人息子を残して別居中でしたが、1907年5月にクラクフに到来し、ブロニスワフとともにチェコの保養地カールスバード(カルロヴィ・ヴァリ)で2ヶ月弱静養したあと、ガリツィア南部の保養地ザコパネで同棲生活を始めます。9月9日付二葉亭宛書簡は「結婚しました」と報じています[写真11——写真は書簡に同封]。マリアは10月末にペテルブルグへ戻りました。

マリアのクラクフ再来は1908年1月後半でした。彼らは8年3月から翌年春までガリツィア東部の町ルヴフ(現リヴィウ)で暮らします。ブロニスワフはマリアという伴侶を得て、ルヴフ

⁵ 当時のポーランドはロシア・オーストリア・プロイセンの3帝国によって分割され、亡国状態でした。ガリツィアまで辿り着いたピウスツキは、故郷のリトワニアはおろか、ロシア統治下のワルシャワすら赴いた形跡がありません。ポーランドを分断する奥露国境は、彼の地球一周の成就を阻んだわけです。

では充実した至福の1年を送ったことでしょう。落ち着いてサハリン研究の成果を纏めだしました。以降の4年間、彼はポーランド・ロシア・ドイツ・フランス・スイス・英国・米国の雑誌に夥しい数の論文を発表しています。生活は恐らく稿料で立てていたでしょう。マリアは声楽のレッスンに通って、生計を支えるべくプロの歌手を目指します。だが、彼女は発病して乳癌と診断され、1909年の春にはペテルブルグの「法律上の夫(ヤン・ジャルノフスキ)」の許へ戻ることを余儀なくされます。5月に執刀された手術の結果、乳癌はかなり重症で転移もあることが判明しました。

1908年7月15日から翌9年4月まで、二葉亭四迷が朝日新聞特派員としてペテルブルグに滞在します。彼は帝都でマリアとは会えたものの、ブロニスワフはその機会を逸しました。ポーランドも訪れる筈だった二葉亭は、9年2月に風邪をこじらせて肺結核を発症し、帝都滞在を切り上げて帰国途上の5月10日、ベンガル湾上の船内で落命したからです。

その後の1年半(1909年8月～11年1月)は、ルヴフ有力紙の通信員も兼ねて西欧諸国を遍歴しました。パリに7ヶ月滞在中(1909年10月～10年5月)、術後に小康を得たマリアが再びクラクフに到来する。ブロニスワフは彼女を迎えに赴き、9年11月半ばにはパリに連れてきたらしい。しかし10年4月、病状が悪化して再手術が必至となるや、マリアは己の意思でパリを去り、「法律上の夫」の許へ帰っていきました。

残されたブロニスワフは1910年6月から翌11年1月までロンドンに滞在します。日英博覧会の通行証入手に7週間を要したものの取得後は日参して、「アイヌ村」を実演する沙流アイヌの一行から50篇以上の説話を採録しました。1911年1月にはパリを経由してクラクフに戻ります。同年5月12日、マリア・ジャルノフスカがペテルブルグで永眠しました。

ポトハレ地方の大地主ザモイスキ伯爵は11年夏～12年4月、傷心のブロニスワフを慰撫すべくクウジニツェの屋敷に招きます。ピウスツキはまず11年7月半ば、クラクフで開催の「ポーランド医師・博物学者大会」で「ギリヤークにおけるハンセン病について」と題する報告を行いました。同伯爵との対話でぶち上げたポトハレ地方郷土誌研究会の設置計画は、11月にタトラ協会民族学部門として結実します。彼はその議長に就任し、ザコパネのタトラ博物館を拠点にポトハレ地方の山地民研究を主導することになりました。1912年9月頃、主著『アイヌの言語・フォークロア研究資料』がクラクフで上梓されました[写真12]。10月、博物館事情視察のためスロヴァキアのマルティンとチェコのヴィノフラディへ行きますが、12月には唐突に議長職の辞任を申し出て、スイスのヌシャテルへ旅出てしまいました。辞任は受理されず、彼は国外から送付する手紙で議長の職責を全うすることになります。

ヌシャテルには1913年1月から4ヶ月滞在し、ヌシャテル大学の聴講生となり、その間には論文「ギリヤークとアイヌにおけるハンセン病」を攷筆しています。その後はパリ(5月初め～7月10日)とベルギーのブリュッセル(7月10日～10月)に滞在しました。したがって、8月3日に举行されたタトラ博物館新館の起工式には、言い出しっぺのピウスツキが欠席したわけです。10月にはザコパネに戻り、民族学部門議長として、地元のポトハレに加えてオラヴァ、スピシュ両地方の郷土誌研究にも邁進します。彼はタトラ協会の幹部となり、創刊が決まった『ポトハレ年報』の編集主幹も務めました。

1914年3月、クラクフのポーランド人文・科学アカデミーが民族学委員会を新設し、ピウスツキは同委員会での唯一の有給職員である書記に任命されます。これは彼が7年半の欧州生活で初めて手に入れた定職・定収入です。彼はザコパネにもしばしば赴き、『ポトハレ年報』創刊号の編集作業を完了させますが、上梓された本冊を見ることは叶いませんでした。ポーランド独立後の1921年によく公刊された創刊号の巻頭には、シェロシェフスキのピウスツキ追悼文が掲げられています。

1914年8月5日、オーストリアがロシアに宣戦布告し、第1次世界大戦が勃発します。12月初めにはロシア軍のガリツィア進駐が現実味を帯びて、彼は首都のウィーンへ逃れました。47才のブロニスワフは再び大きな戦争に翻弄されて、サハリン研究を集大成する好機を逸することになります。

彼はその後、ウィーンに半年(1914年12月～翌15年4月)、スイスに2年半(1915年4月～17年11月半ば)、パリに半年と、政治に明け暮れた3年半を過ごして、1918年5月半ばにパリで自死を遂げました。非政治人間のブロニスワフも、戦時下の亡命生活では政治に手を染めざるを得なかったわけです。

亡国の民であるポーランド人は、澎湃たる民族自決の気運を国家再建の好機と捉えますが、その戦術をめぐるには3政治会派が鎬を削っていました。一つはロシア統治下のワルシャワを拠点とする民族主義志向の親露派、一つはローザンヌに結集して保守主義を標榜する亡命ポーランド人らの親西欧派、今一つがユゼフ・ピウスツキを頭に戴くポーランド社会党系の親奥派です。ブロニスワフはまず、バンドウルスキ・ウィーン司教の率いる親奥派の許に身を寄せたのです。

彼に託された初仕事は『ポーランド百科事典』編纂における3会派間の調整です。ウィーンとワルシャワとローザンヌで独自に進行する同事典の編纂事業は、いずれも在米ポーランド人の募金を当てにしたため3事業の統合が焦眉の急となり、白羽の矢が彼に立ったのです。ブロニスワフは、1915年3月31日に発給されたオーストリア旅券⁶を携え、親奥派代表としてローザンヌに乗り込みますが、激烈な論戦が交わされた席上では公正な仲介役に徹して、数ヶ月後には統合を成し遂げます。1919～1920年にフリブールとローザンヌで上梓された『ポーランド百科事典』(仏文)は、現在のリトワニア・ベラルーシ・ウクライナも包摂する「大ポーランド王国」にかかわる事項を収録していました。因みに、敵対する二者を仲介し、和解を模索し、統合を志向することは、彼が生涯を貫いて実践した役回りにほかなりません。

1916年の当初、ポーランド国家の再興では避けて通れぬリトワニア問題を討議する「ポーランド・リトワニア委員会」がローザンヌに設置されて、ブロニスワフが議長に就任します。己と志をともにするリトワニア大公国復興主義者と、分離独立を主張するリトワニア民族主義者の和解を模索する彼の努力は遂に稔らず、後者は席を蹴って退場し、同委員会は挫折に終わります。その後も中立国スイスのラペルスヴィル、ヴヴェイ、チューリヒ、ジュネーヴ、フリブールにも滞在して、己が担当する『百科事典』項目の執筆に専念しました。

1917年6月、ブロニスワフはチューリヒのポーランド協会と組んで、戦禍に遭ったガリツィアの子供らをスイスへ避難させる救援事業を立ち上げます。彼はツイベルク伯爵と連名で在米音楽家のパデレフスキへ電報を送って、米国での基金構築を要請しますが、後者は全米から寄せられた5万スイス・フランを、ポーランド協会には断りなく、両者連名の銀行口座に振り込んでしまい、醜聞事件にまで発展しました。協会幹部はブロニスワフを強く非難し、彼の高潔さや愛国心をあげつらい、学術業績までも嘲笑の的にしたことで、彼の心は深く傷つきました。

8月15日、親露派の保守政治家ロマン・ドモフスキが「ポーランド国民委員会」をローザンヌで立ち上げると、連合側は直ちに同委員会を、ポーランド人の政治的願望に応える唯一の代表機関として承認しました。ドモフスキはユゼフ・ピウスツキの宿敵でしたが、当時のユゼフはドイツのマグデブルク監獄に収監され、政治生命の危機に瀕していました。それを好機と捉えた国民委員会は、パリに設置した委員会代表部の常勤ポストをユゼフの兄へ提示し、兄はそれを受け入れましたが、その動機はいまだ判然としません。とはいえ、ブロニスワフは11月中旬、パリに到着して代表部公館内の一隅に居を構えました。

1918年5月3日、ブロニスワフは国内外で敵対する3政治会派の和解を促す覚書を摺筆して、多くの知友の間に届けて回ります。覚書は遺書のようにも読めますから、彼はこのときすでに死を意識していたのかも知れません。その後間もなく、彼は急速に衰弱し、妄想を口にし、

⁶ ロシア帝国ヴィルノ県生れのブロニスワフは紛れもなく同帝国々民です。1903年6月にはロシア帝国の国外用旅券を携えて北海道調査に赴きました。しかし同旅券は、1905年11月半ばの浦塩騒乱時に革命派の誰かに譲ったとも、翌6年の晩夏、米国横断中に紛失したとも伝えられています。したがって、入欧後のピウスツキは無国籍の亡命者として処遇されてきたわけです。

異常行動も見せるようになります。5月16日、友人が手配した医師の診察からは放心状態で戻ってきました。翌17日午前11時45分、「芸術橋」の上で上着を脱いでセーヌ川へ抛るや、己の身もそこへ投じた男を同橋の守衛が目撃しました。遺体は21日午前8時15分、ミラボ一橋の袂で発見されます。その「男」がブロニスワフ・ピウスツキでした。享年52。

5月29日、ポーランド国民委員会が計画したノートルダム大聖堂での葬儀は急遽中止され、遺骸はパリ郊外モンモランシーのポーランド人墓地へ運ばれて、そこに埋葬されました。彼は今なお同墓地に眠っています。

チュフサンマとその家族

最後に、樺太島に留まったブロニスワフの家族のその後について簡単に触れておきます。

チュフサンマは1909年以前に、助造・キヨを連れて隣村セラロコ(白浦)の白川シリケシタンと再婚しています。キヨは長じて、タコエ(大谷)酋長の息子大谷熊吉に嫁ぎました。1921年には樺太庁が集住村の白浜を建設したため白川家も大谷家も白浜に移住し、隣接する板張り住宅に入居しました。1929年に白浜を訪ねた金田一京助は助造が「漁場」で働き、熊吉・キヨ夫妻は「白濱旅館」を経営と伝えています。1934年にブロニスワフの遺族を求めて白浜を訪ねたポーランド人記者ヤンタ=ポウチンスキは、チュフサンマがすでに視力を喪失し[写真13, 14, 15]、遺族の生活は貧しくて不如意と記しますが、犬橇操作に長けた助造は、東京の博覧会に橇と30頭の橇犬を連れて参加し、天皇の娘たちを乗せて犬橇走を披露したとも伝えています[写真16]。これは1930年に両国国技館内外で開催の北海道拓殖博覧会ではなかったかと推察されます。因みに助造は1935年、恐らくはその犬橇操作能力が買われて、東京大学樺太演習林に業務補助員として雇用され、東大による雇用は定年退職する1967年まで32年もの長きにわたりました。チュフサンマは1937年1月18日、白浜で永眠しています。享年58。

大谷家では1922年に長女ミドリ、31年に次女ナミ、36年には三女ヒトミが誕生します。長女は相馬岩二郎と結婚、45年4月には娘の君江をもうけますが、46年に白浜で亡くなりました。同年10月には大谷熊吉も病死しています。したがって、1948年11月に北海道へ移住したのは、大谷キヨと二人の娘、そしてミドリの娘君江の4名だけで、函館を経由して広尾郡大樹町に落ち着きました。木村助造は同年12月、演習林の仲間らとともに日高郡富良野町に至り、引き続いて東大北海道演習林に勤務しました。

木村助造は1954年に吉田春江と結婚し、翌56年3月には長男和保が誕生します[写真17]。助造は上述の如く67年に東大を定年退職し、その4年後の1971年6月8日に67年の生涯を閉じました。一人息子の木村和保氏は1973年に高校を卒業すると上京します。82年には黒田知子さんと結婚して、神奈川県に在住です。夫妻は3人の娘を育て上げて、今は二人の孫にも恵まれています。

大谷キヨは終生大樹町で暮らして、1984年1月4日に永眠しました。享年80。晩年には姪の相馬君江さんと養子縁組を結んでいます。次女の高橋ナミ子さんは3男2女に恵まれ、長男收史氏、3男峰夫氏、次女園美さんは大樹町におられますが、次男睦雄氏と長女由美さんは関東地方に在住です。キヨの三女ヒトミさんには2男1女がおられて、今や数名の孫にも恵まれているそうです。高橋ナミ子さんは2016年3月1日に大樹町で逝去されました。享年85。

とはいえ、日本に目下在住するブロニスワフ・ピウスツキの子孫はおおよそ40名を数えますから、日本におけるピウスツキ家は今後とも存続するでしょう。

2. ピウスツキのサハリン研究

ブロニスワフ・ピウスツキは19才から39才までの19年を極東で過ごしますが、サハリン研究では1896年を節目として、ニヴフを調査した10年と、主としてアイヌ研究に従事した10年に折半されます。彼は1887年3月、ペテルブルグ帝大法学部1年次在籍中に樺太島へ追放されますから、流謫中のサハリン研究は無手勝流の独学で始まります。とはいえ、後にニヴ

フ研究の泰斗となるリュフ・シュテルンベルグとの出会い(1891年正月)と、その後推進された共同研究は、ピウスツキを異色の人類学者に育て上げました。

彼の人類学関係処女作「樺太ギリヤークの困窮と欲求」は、1890年代に実施したニヴフ調査の成果を取りまとめたもので、ニヴフ子弟の教育、教師養成、新生業の導入など、応用人類学的姿勢に徹した特異な民族誌です。彼が採録して露語訳を付した大量のニヴフ語テキストはシュテルンベルグへ送付されて、後者の著作に収録されましたから、この分野で自前の業績は僅かですが、近年に発掘・公刊された遺稿も少なくありません。これらすべては、近刊のマイエヴィチ教授編『ピウスツキ著作集』第5巻ニヴフ篇に収録される、と伺っています。ピウスツキはシュテルンベルグとともに、ニヴフ研究の草分けと見做すべきでしょう。

アイヌ研究では、1912年にクラクフで上梓された英文の主著『アイヌの言語・フォークロア研究資料』がよく知られていますが、研究の全体像はマイエヴィチ編『ピウスツキ著作集』1～3巻から把握することが可能です。ピウスツキは1896年にエンチウとの初邂逅を果たしたものの、実際は1902～1905年の僅か3年で、アイヌ語のイロハから学び始めて、1,000頁超の大冊3巻に収まるような研究成果を創出したわけです。彼のフィールドワークは日露開戦の2年前から終戦の3ヶ月前までという、物情騒然たる物騒な世情のもとで遂行されたにもかかわらず…です。

ピウスツキのアイヌ研究はアイヌ語テキストの採録・分析、辞書作成や、エンチウ文化のさまざまな側面(例えばシャマニズム、出産慣行、ハンセン病、熊送りなど)をめぐる民族誌で構成されています。とりわけ大作の「樺太アイヌの熊祭りにて」(1915)は、自らが参与観察した熊送りを微細にわたって活写する民族誌の白眉、直ちに映画やテレビドラマのシナリオの底本となれそうな作品です。

ピウスツキはまた「樺太島のオロッコへの1904年の旅より」(1913)と題するウイльта民族誌も執筆しました。百年以上も昔のウイльта文化を伝えるこの希有な作品は、英訳稿が『ピウスツキ著作集』第1巻に収められています。彼にはウイльта語のほかに、ウリチ語・ナーナイ語などの関連著作もあって、『ピウスツキ著作集』第4巻ツングース語篇に収録されています。ピウスツキはツングース研究の草分けでもあったのです。

ブロニスワフ・ピウスツキのサハリン研究は、ニヴフ・エンチウ・ウイльтаの言語と文化の、20世紀初め前後の実態を記録した頗る貴重な仕事と言えるでしょう。

今年はピウスツキ没後百周年に当たります。この記念すべき年の1月に、私は『ブロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌』と題する編訳書を「東北アジア研究センター叢書」63号として上梓することができました。同書は樺太島にかかわる彼の人類学的労作をほぼ網羅する11論文の邦語訳を収録していますが、鳥居龍蔵と和田完の既刊訳業を別にすると、ほとんどが本邦初訳です。かくて日本語の読者は彼のサハリン民族誌を日本語でも読むことが可能になりました。『サハリン民族誌』は参考論文・記事として、1903年の北海道アイヌ調査を詳述するシェロシェフスキの「毛深い人たちの間で」、「樺太島におけるチュフサンマとその家族」、「日本の新聞が報じたピウスツキ関係記事」、「ピウスツキ年譜」なども収めています。同書は非売品ですが、5月以降には国内外の主要な大学図書館に献本されますので、閲読を希望される方は、最寄りの大学図書館で御高覧に供していただくと幸甚です。

因みに、同書を『サハリン民族誌』と命名したのは、ピウスツキ自身に同様な著作の執筆計画があったにもかかわらず、第1次大戦が同計画を頓挫させてしまったから、彼の見果てぬ夢を曲がりなりにも叶えさせたいと願ったからです。

ところで、同書所載の1篇「アイヌの生活整備と統治に関する規定草稿」は、ピウスツキがエンチウの人権問題をどのように捉えていたかがよく窺える好著ですので、最後に触れておきたいと思います。

これはリャプウノフ知事の懇願によって執筆されたもので、彼が自発的にものした作品ではありません。だが彼は1905年3月、サハリン研究の18年の蘊蓄を傾けるばかりか、16才頃にヴィルノの職人たちに試みた非合法のポーランド語教育の志までも踏まえつつ、全力投球で

一気呵成にこれを書き上げたと推測されます。

既述のように、リャプゥノフ知事は1903年10月に草稿の起草をピウスツキに委嘱し、1905年6月には法案の形に整えられた改訂稿を受領しますが、7月19日には日本軍に降伏して東京へ護送されていますから、同稿に目を通す機会は恐らくなかったでしょう。にもかかわらず、ピウスツキの「アイヌの生活整備と統治⁷に関する規定草稿」は今や日本語でも読めるようになりました。

「規定草稿」は、エンチウの存続を前提とする政治・社会・経済面での制度改革を法制的に担保し、監獄体制の終焉と地方自治制度の導入は必至との視座から、より良き未来を実現するための28ヶ条、即ち、頗る具体的な提案で構成されています。全体は(1)社会・政治面の整備、(2)義務と社会保障、(3)備蓄倉庫、(4)狩猟・漁撈と分与地、(5)アルコール対策、(6)互助基金、(7)医療制度、(8)学校教育、(9)司法分野での特別措置、(10)異族人長官⁸と知事の職責・統制の10群に大別できますが、生活の全領域をほぼ網羅する内容でした。総じて言えば、同草稿は、20世紀初めに執筆されたとは信じがたいほど斬新なアイデアに充ちており、その価値は今なお失われていないでしょう。

ピウスツキはその際、(1)エンチウが個別集団として存続し、(2)他の社会集団と対等な構成員として国家・社会に統合されることを大前提としていました。大袈裟に言うと、これは彼らが近代国家に統合されるための近代化戦略にほかなりません。

例えば、第1条は次のように謳っています。

「各村落は公選村長を有し、各地区（郷）は公選郷長ならびに二名の助役を有すべし」。

村長と郷長は公僕として3年任期で互選され、知事直属の行政官「異族人長官」の監督下で地域自治を遂行します。「郷」は幾つかのコタンを包摂する行政村ですが、東西両海岸に各2郷、都合4郷が想定されて、裁判権も含む郷レベルの自治が担保されます。エンチウ全体にかかわる重要案件は、必要に応じて招集される「異族人政庁」で審議決定される仕組みですが、これには4郷長と8助役が出席し、異族人長官が差配します。

1条の解説は以下の通りです。

「アイヌ村落は、より多くの人口を擁することが望ましく、また可能な限り、強制手段の行使は差し控えるだけでなく、むしろ各種奨励措置を駆使して、自然条件が海洋漁業・牧畜・菜園経営のいずれをも可能とする一村に、小規模な数ヶ村を集住させることが必至であろう」。

彼はこのように伝統生業の近代化と発展を展望して、各村落には農地・牧地・草刈地を含む然るべき規模の土地が分与されると定めています。集住村は、急増が予想される競合者に対抗できるような態勢作りが狙いでした。

彼はさらに教育効果も見込めるとして、漁獲物売却の決済時における直接税の賦課を提起して、第13条の解説で以下のように説明しています。

「サハリンの異族人らは今なお《ヤサク》⁹、ならびに公租全般についても、一切の支払いが免除されているとはいえ、島の天然資源は恐らく、全国庫負担の一部をその住民に担わせることを十分に可能とするであろう。格別に重いものはむろん論外であるが、直接税の支払いは教育的効果も有するであろう。異族人が、彼の部族へ安全と福利を提供する国家の歳入に、自らも応分に寄与するとの自覚は、たとえ微々たるものであれ——今はかなり希薄であると認めざるを得ない異族人と国家の——繋がり強化に多少とも肯定的に貢献するであろう」。

彼はこのほかに医療制度や学校教育でも具体的に提案していますが、ここでは生存戦略に直接かかわる「備蓄倉庫」と「互助基金」だけの言及に留めます。

第15条はこのように語ります。

「各郷は一棟以上の公共倉庫を設置し、小麦粉・米・魚などの必需品を備蓄すべし」。

7 「統治(управление)」は、後述のように「エンチウ自身による自治」も含意していたと判断されます。

8 「異族人長官」はピウスツキ独自の用語で、異族人事務を管掌する行政官です。

9 異族人に課される人頭税、元来は毛皮で徴収されたため毛皮税と邦訳されることもあります。

郷は現物徴収に代えて、現金による徴収を定め、基金を創設することも可であり、同基金は貸付金や、困窮者に対する永久貸付金として支出することも可なり。倉庫と基金の維持・管理は、郷長とその助役の職責に、また監督責任は異族人長官に、それぞれ委ねるべし」。

そして最後の第 28 条は、次のように結ばれています。

「知事は異族人統治の全般を統括すべし。異族人長官は知事に直属し、異族人の福利を担保する究極的責務は知事に存する」。

以上は彼の提案のごく一部に過ぎませんが、人道主義・民主主義・自治の原理に立脚するピウスツキの近代化戦略の片鱗はお伝えできたかと存じます。詳しくは拙訳稿を御参照下さい。

日露戦争でロシアが敗北した結果、コルサコフスク管区は日本領「南樺太」となり、住民のエンチウは日本帝国の統治下に否応もなく編入されました。そして、ピウスツキがエンチウのありうべき近代化を模索しつつ、全知を傾けて起草した「アイヌの生活整備と統治に関する規程草稿」は画餅に帰してしまっただけです。もし日露戦争が起きなかったならば、あるいは、もし樺太庁がピウスツキの「規程草稿」を採用していたならば、エンチウの運命は全く異なる道を辿ったであらうでしょう。

3. バフンケ酋長、こと木村愛吉の髑髏¹⁰

往時には邦領南樺太東海岸のバフンケ酋長として知られた木村愛吉の髑髏が、北大医学部収蔵の人骨資料中に見出されるとの情報、『北海道大学医学部アイヌ人骨収蔵経緯に関する調査報告書』(2013)で初めて公開されました。但し、同書はそれを人骨 943 号(相浜 1)と記すのみで、木村愛吉の遺骨とは明記していません。とはいえ、エンチウ人骨 71 体中で「個人特定可能」と特記されるのは「相浜 1」だけで、児玉作左衛門北大教授が 1936 年 8 月に東海岸の相浜で発掘した「頭骨」と記載されています。しかも北大収蔵アイヌ人骨としては、二人のアイヌ著名人(「日高酋長ペンリュウ[正しくは平村ペンリ/ペンリウク]」と「樺太酋長バフンケ」)が言及されています。そこで、私は 2016 年 4 月、同大学の「アイヌ遺骨等返還室」に対し「相浜 1」と「バフンケの髑髏」の同一確認を求めましたが、私の申し入れは個人情報保護を口実に峻拒されました。

その後、横浜の木村和保氏は 2017 年 4 月、祖母チュフサンマの叔父に当たる木村愛吉の遺骨返還請求書を北大に提出しました。和保氏はブロニスワフ・ピウスツキの一人息子助造の唯一の御子息ですから、それは日本におけるピウスツキ家の問題でもあります。

「アイヌ遺骨等返還室」は同年 7 月 6 日付で木村和保氏を遺族の一人と認め、7 月 14 日から 1 年の公示期間中に他の遺族からの請求がなければ、返還交渉に着手するという段取りを通達しました。つまり、正式の返還は本年 7 月 14 日以降に決定されるわけです。とはいえ、平取の平村ペンリウク氏の事例では、返還交渉が軌道に乗り出したところで、平村氏の遺骨ではないとしてキャンセルされただけに¹¹、本件の成否は今なお予断を許しません。

木村愛吉(1850 頃～1920)は樺太東海岸小田寒の出身。明治初年にアイ・コタン(相浜)に居を構えて以来半世紀にわたりエンチウ有力者として活躍し、1920 年に相浜で没しました。ロシア時代末期にはロシア人や日本人の漁業者に伍して 2 漁場を賃借、資本主義的経営の漁業を起業して蓄財に努め、ペチカの備わるロシア式丸太小屋まで建てています。「樺太でも有名な暖かい家」とされる同宅にはピウスツキが寄寓し(1902～1905)、姪のチュフサンマと恋仲になって結婚に至りました。結婚前のチュフサンマは父シレクア(愛吉の兄)とともに、隣接するアイヌ式住宅で暮らしていたようです。

50 代の木村愛吉と直に接した松川木公は彼を「容貌頗る魁偉、身の丈は六尺五寸に餘」る大

¹⁰ 本節の初出は「《樺太酋長バフンケ》の髑髏、遺族への返還なるか」(POLE 93, 2018.1) です。

<http://hokkaido-poland.com/POLE/POLE93BafunkeInoue.pdf>

¹¹ 平村ペンリウクの遺族土橋芳美さんは、その経緯を長篇叙事詩として公刊されました(土橋芳美『痛みの中のペンリウク 囚われのアイヌ人骨』東京・草風館、2017)。

男、風貌は「動物園の獅子」さながら[松川『樺太探検記』(1909)]と、石田収蔵は「巧みに邦語を談じ、露語に通じ、外交に敏」[青山『極北の別天地』(1918)]と評し、青山東園はロシアの文豪トルストイやゴーリキー、千徳太郎治は西郷南洲になぞらえていました。因みに、ピウスツキの撮影した写真に収まる瘦身の木村愛吉[写真 18, 19]から 197 センチ超の巨漢を想像できる人は稀でしょう。日露戦争最末期の 1905 年 9 月 3 日、南部樺太占領軍の太秦供康支隊長はボリショエ・タコエ(大谷)で「バフンケ酋長」と別れの杯を交わした際、彼のスケッチ[写真 20]を「樺太出征日誌」に残しています。写真とほぼ同年配の愛吉の風貌は、やや端麗に過ぎるとはいえ、松川らの記述とも矛盾せぬように思われます。

樺太庁は 1921 年、東海岸中部の 10 コタン¹²の住民を集住させるべく白浜村を建設しました。総移住が開始された 8 月 1 日には村長以下 9 名の村議(あるいは評議員)からなる村の統治機構が整備され、村長には魯礼部落総代だった内藤勘太郎が、そして残る 9 コタンの部落総代が村議に就任します。例えば大谷熊吉(チュフサンマの娘キヨの夫)は、大谷の前部落総代として村議を務めました。こうして 10 コタンは廃村となりますが、旧村にあった墓地は恐らくその後も踏襲されたものと推定されます。

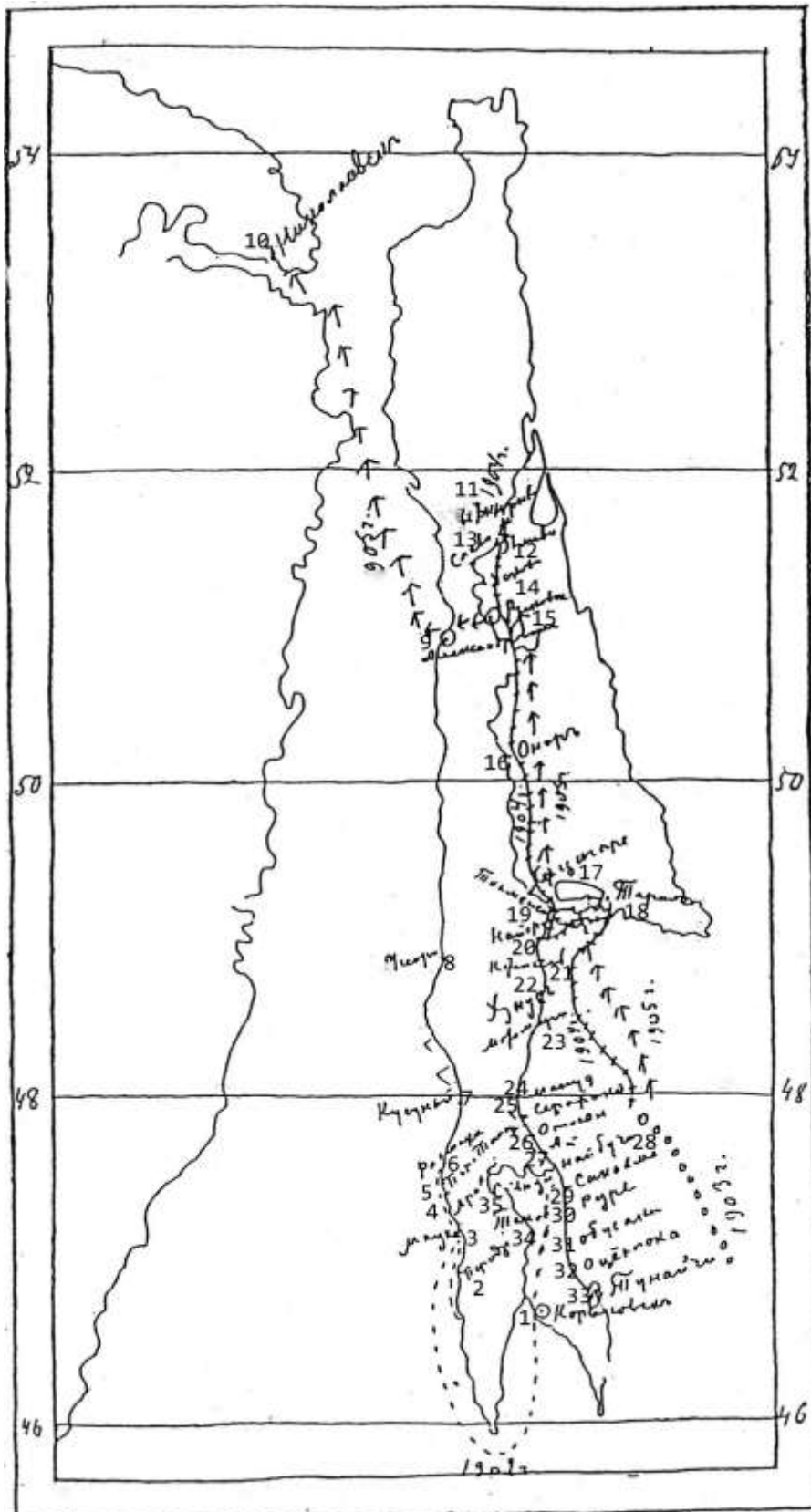
木村愛吉は 2 度の妻帯歴にもかかわらず、いずれの配偶者も子宝には恵まれず、養子の男子親族レーヘコロ(1890~1930 年代後半、日本名木村愛助)に資産を相続させました。千徳太郎治によると邦領時代の愛吉は、その「露西亜式の大建物[=丸太小屋]」が樺太庁から驛通に指定され、「相川渡船を兼ねて営業し」、「部落總代等の公務にも就かれ、公衆の爲め盡くされ」、そしてこの「大建物」では旅籠屋を営んだとも伝えられますが、愛吉の没後に「二代目の愛助が此の家を他人に賣却して仕舞つた」[『樺太アイヌ叢話』(1929)]そうです。木村愛吉一族は日本統治下で次第に没落してゆき断絶したらしく、愛助の子孫に関する情報は不詳です。木村愛吉が 1921 年の白浜集住を待つことなく、その前年に亡くなったのは却って仕合せだったかも知れません。

本年 1 月 10 日に上梓された『ブロンスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌』は、拙稿「樺太島におけるチュフサンマとその家族」を参考論文として収録しています。同稿で本件に直接かかわる「エピローグ」から最末尾の一節を、以下に転載します。

[北海道]大学の「アイヌ遺骨等返還室」は木村氏の請求を審査し、近い将来には、「バフンケ頭骨」を正統な遺族に返還するか否かを決定するであろう。その回答がいずれであれ、北海道大学は以下の設問に対し、誠実に答える責務を負っている。

- (1) 一九二〇年の埋葬後十六年しか経っていない木村愛吉の墓は一九三六年八月一日、相濱のエンチウ墓地で、果たしてどのように、何故、また誰によって、暴かれることになったのか。
- (2) 「相浜 1」が木村愛吉に帰属することを立証する議論の余地のない根拠は何か。「樺太酋長バフンケ」なる名称が、他の七十体のエンチウ遺骨とは違って、例外的に記録されえたのは何故か。
- (3) 北海道大学は木村愛吉の頭蓋骨取得以降八十年の長きにわたって、その存在を学外、なかんずく彼の子孫へ向けて発信することを怠ってきたのは何故か。

¹² 北から南へ、オハコタン/箱田、マヌエ/眞縫、シララカ/白浦、オタサン/小田寒、アイ/相濱、ナイブチ/内淵、サカヤマ/榮濱、ルレ/魯禮、シヤンチャ/落合、タコエ/大谷の 10 コタン。前者がアイヌ名、後者は日本名です。



樺太島地図 (ピウスツキ作図) *1

地名対照表 *2

	<u>キリル文字</u>	<u>ローマ字</u>	<u>エンチウ語</u>	<u>日本語</u>	<u>現代ロシア語</u>
1	Корсаковскъ	Korsakovsk	Poroantomari	大泊	Korsakov
2	Перодзі	Perodzi	Perochi	廣地	Pravda
3	Маука	Mauka	Mauka	眞岡	Xolmsk
4	Аракоі	Arakoi	Arakoi	荒貝	Vyselki
5	Поротомари	Porotomari	Porotomari	幌泊	Simakovo
6	Рамаха	Ramaha	Pahmaka	樂磨	Mineral'noe
7	Кусунай	Kusunaj	Kusunai	久春内	Il'inskij
8	Уссоро	Ussoro	Ushoro	鵜城	Orlovo
9	Александровскъ	Aleksandrovsk		亞港	Aleksandrovsk
10	Николаевскъ	Nikolajevsk		尼港	Nikolajevsk
11	Ыркырко	Yrnkyrvo			Irkir
12	Пливо	Plivo			Pilevo
13	Славо	Slavo			Slava
14	Усково	Uskovo			Uskovo
15	Рыковское	Rykovskoe		ルイコフ	Kirovskoe
16	Оноръ	Onor			Onor
17	Социгаре	Socigare	Sacihare	佐知	Južnyj
18	Тарайка	Tarajka	Taraika	東多来加	Promyslovoe
19	Тихменевскъ	Tixmenevsk	Sisika	敷香	Poronajsk
20	Найеро	Najero	Nayoro	内路	Gastello
21	Котанкесь	Kotankes'	Kotankesi	古丹岸	Gorjanka
22	Хунупъ	Xunup	Hunup	斑伸	
23	Мотомари	Motomari	Motomari	元泊	Vostočnyj
24	Мануэ	Manue	Manue	眞縫	Arsent'evka
25	Серароко	Seraroko	Siraraka	白浦	Vzmor'e
26	Отосанъ	Otosan	Otasan	小田寒	Firsovo
27	Ай	Aj	Ai	相濱	Sovetskoe
28	Найбучи	Najbuči	Naibuchi	内淵	Ust'-Dolinka
29	Сакаяма	Sakajama	Sakayama	榮濱	Staro-dubskoe
30	Руре	Rure	Rure	魯禮	Rorej
31	Обусаки	Obusaki	Obusaki	負咲	
32	Оцѣхпока	Oc'oxpoka	Ochohpoka	落帆	Lesnoe
33	Тунайчи	Tunajči	Tunaicha	富内	Oxotskoe
34	Такое	Takoe	Takoe	大谷	Sokol
35	Сянцы	Sijancy	Siyancha	落合	Dolinsk

*1 本図は В・ピウスツキの「復命報告 5」“Отчетъ Б. О. Пилсудскаго по командировкѣ къ айнамъ и орокамъ о. Сахалина въ 1903-1905 гг.,” *Извѣстія Русскаго комитета для изученія Средней и Восточной Азии*, № 7: 52, СПб. (1907); その英訳版 [A. F. Majewicz (ed.), *The Collected Works of Bronislaw Pilsudski*, vol. 3: 221, Berlin & New York: Mouton de Gruyter (2004)] 所収。ピウスツキ自身が作製した地図には 1902 年、1903 年、1904 年、1905 年における彼の路程も記入されている。同地図への数字挿入、画像の貼り付けは兎内勇津流氏にお願いした。

*2 本図では各地名の所在地が、それぞれの地名に追記されたアラビア数字によって同定が可能である。ここでは A・F・マイエヴィチ氏が同地図に付与した一連番号 [Majewicz 2004: 219-220] を踏襲している。



写真1：1875年の大火以前のズーフ荘園
[A. Garlicki, *Józef Piłsudski 1867-1935*, Kraków:
Wydawnictwo Znak, 2008]



写真2：両親のユゼフとマリア [Garlicki 2008]

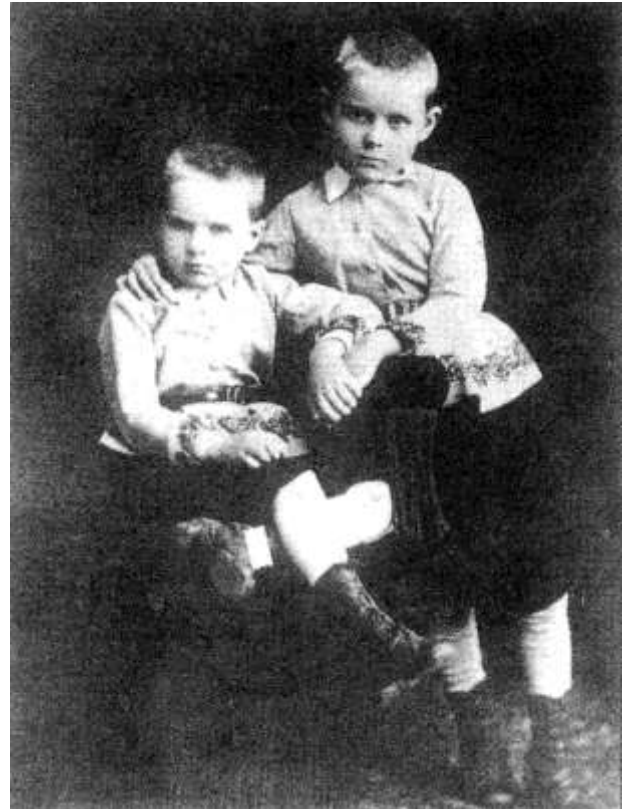


写真3：1870年頃の兄ブロニスワフと弟ユゼフ
[S. Koper, *Piłsudski: Człowiek i Polityk*, s.16,
Warszawa: Bellona, 2010]



写真4：1885年のブロニスワフ（右端）、ユゼフ（右から二人目）とスピイニャの仲間 [Koper 2010: 21]



写真5：サハリン時代のブロニスワフ
(Tadeusz Kadenacy 氏蔵、木村和保氏提供)



写真7：1903年夏のブロニスワフ
(函館の井田写真館にて)



写真6：1917年のバフンケと青山東園
[青山東園『極北の別天地』東京：豊文社 1918]



写真8：チュフサンマと少女
(1902~1905年、ピウスツキ撮影)



写真9：助造を抱くチュフサンマとその親族
(1904~1905年、ピウスツキ撮影)



写真11：マリア・ジャルノフスカとピウスツキ
(1907年、ガリツィアにて)



写真10：二葉亭四迷とピウスツキ
(1906年、東京の中黒写真館にて)



写真12：ブロニスワフ・ピウスツキの油彩肖像画
(1912年クラクフにて、A・ヴァルナス制作、ユゼフ・ピウスツキ博物館(スレニューヴェク)蔵)



写真 13 : 1934 年 1 月のチュフサンマ
[A. Janta-Polczyński, *Ziemia jest okrągła*, Warszawa: Rój 1936]



写真 14 : チュフサンマとナミ子 (1931~1933 年撮影)
[能仲文夫『北蝦夷秘聞』豊原/大泊: 北進堂 1933]



写真 15 : 53 才のチュフサンマ (1931 年 8 月 15~16 日、白濱にて) [北里闌『日本語原研究の道程』豊中: 紫苑会 1932]



写真 16 : 1934 年 1 月の木村助造
[Janta-Polczyński 1936]

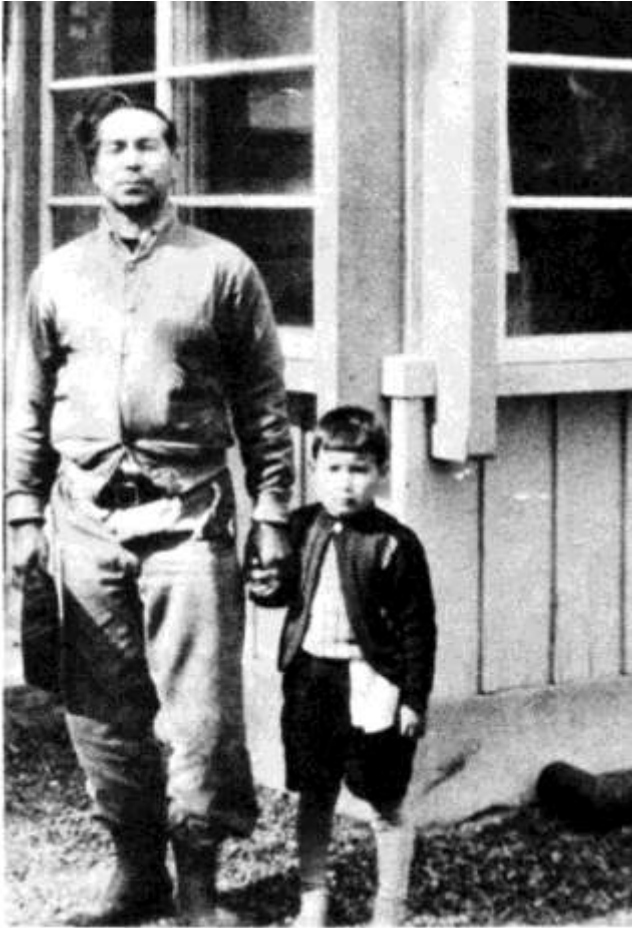


写真 17：1960 年頃の木村助造・和保（木村和保氏蔵）



写真 19：バフンケ（1902~1905 年、ピウスツキ撮影）



写真 18：バフンケ（1902~1905 年、ピウスツキ撮影）

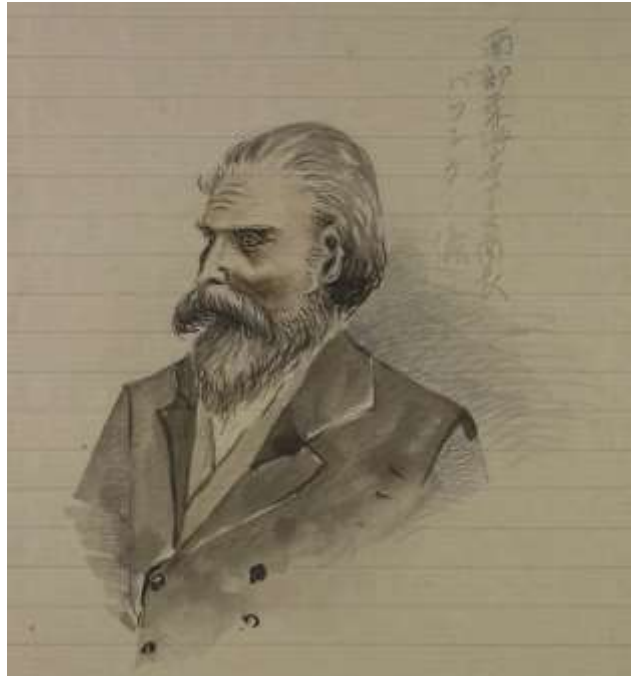


写真 20：南部東海岸アイヌ酋長 / バフンケノ像
（北海道博物館所蔵手稿、
太秦供康「明治三十八年 樺太出征日誌」）